

解答または解答例及び出題意図

年度	2025 年度
研究科	教育学研究科
専攻・コース等	教育学専攻
試験科目	専門科目

I 期

共通問題

出題された英文は、小原國芳『全人教育論（改版）』（玉川大学出版部）に基づく。入試要項において本書は指定図書として明記され、事前に確認しておくことが指示されている。本問では、その前提に立ち、本文の内容を的確に理解しているかが問われる。

(1) では、本文に即して小原の人間観の骨子を把握し、主要語句を踏まえつつ概要を簡潔に述べているかが評価基準となる。小原は、人間を個人から神の子にまで及ぶ多面性と体系的秩序をもつ大宇宙と捉える。各人が唯一無二の存在として内的発展により天性自然を發揮するとき、独自の完全境に至るとし、その理想の在り方を「全人」と呼んでいる。

(2) では、「a true “whole person”」に下線が引かれ、小原の人間観を示す「ホントの『全人』」の意味内容が問われている。小原は指定図書の冒頭で「全人とは完全人格すなわち調和ある人格の意味」と述べるが、これは没個性的な完全性や均質的な調和を指すものではない。そのような理解と対照をなす「完全人格」「調和ある人格」の意味を踏まえた小原固有の人間理解を、指定図書の内容に即して説明できているかが評価基準となる。

選択問題

●教育学研究・初等教育研究・教師教育学研究コース

- ・中央教育審議会答申に示された「令和の日本型学校教育」の趣旨を正確に理解しているか、またその担い手となる教師に求められる資質能力の内容を適切に把握し、それらを論理的に説明できているかが評価基準となる。

なお、入試要項には、『教職概論（改訂第2版）』（玉川大学出版部）が推薦図書として明記されており、事前に確認しておくことが推奨されている。

- ・(1) は指定図書にある、学校評価に関する基本的な知識（学校の自己評価、学校関係者評価、第三者評価）を確認し、(2) (3) は現状に関する課題を指摘して、あるべき姿を表現することを求めている。(1) では学校の自己評価を基に学校関係者評価が行われていることが理解できていと良い。(2) (3) では、評価の形骸化や単にアンケートが評価であるとの誤った理解が多いことを指摘し、改善策を提示できると良い。
- ・(1) は指定図書にある、「生きる力」、「資質能力の3つの柱」等の17/18年版学習指導要領に関する知識を確認しているのかを問うている、(2) はその課題を指摘して、あるべき姿を表現することを求めている。例えば「3つの柱」と「見方・考え方」の関係性

等について指摘できると良い。

- ・文科省「不登校児童生徒への支援の在り方について」、こども家庭庁「こどもの居場所部会」などの知識があるかどうかを評価ポイントとしている。

具体的には、不登校の子どもの居場所は、登校を強制することなく、心理的安全性が保たれ、自己肯定感の向上を育むことができるなどの場所である。それらを担保するために、学級担任ができることとしては、「児童生徒理解・支援シート」を活用した専門家を交えて連携した組織的・計画的支援、そもそも不登校が生じない学級作り、保護者との情報共有などが必要である。

それらは、なぜ不登校になったのか、その理由や背景を一人ひとりに沿って理解することから始まり、具体的な支援につながる。

大学院において、初等教育研究または臨床心理学の視点からの教育学の研究を遂行するにあたり、最低限必要となる知識を確認するべく出題した。また指定図書の理解度を把握すべく出題した。

- ・子どもがことばを学んでいくプロセスには、社会的相互作用が不可欠であり、特に周囲とのコミュニケーションが重要である。子どもがジェスチャー、例えば指さしを用いて表現する際に大人がその行動に応えること、また、成長した子どもを例にあげて、文化的環境が言語習得に与える影響を考察してもよい。出題意図としては、ことばの学びが個人の内部的な獲得に留まるのではなく、周囲との相互作用を通じて生まれるものであるという理解が示されることを期待している。

●乳幼児教育学研究コース

- ・指定されたテキストにおいて論じられている、「子どもを具体的に見る」際の「具体」と「抽象」という観点に基づき、単に客観的な特徴を記述するのではなく、特定の「課題」を持って子どもを観察することの重要性について述べるのが期待される。具体的には、テキスト内の事例や自身の子どもに対する観察を通じて、どのように具体的な理解を深めるかを考察することが求められる。出題意図としては、保育現場での子どもを見ることについて、自分の言葉で説明できるかを評価するための問題として設定されている。

- ・乳幼児期の子育てを考える上で「愛着」の問題を捉える事は社会構造や子育て支援に対して大変重要な意義を持つこととなる。そのような中で愛着とは何か、この点について理解する事がとても重要となる。また、愛着形成の課題を知る事と、愛着形成が困難になることによってどのような問題が起こる可能性があるかを知る事が重要である。

愛着とは何かについて3つの視点が示されている。また attachment との関係や安全感の輪についての意味と愛着の検査法、及び愛着の類型が示されている。これらの関係を明確に記述する事が求められると共に愛着が人間関係の基本になることについての解説が明確に求められる。

●国際バカロレア研究コース

本研究科のアドミッションポリシーの特に2の(7)にある国際バカロレアの教育の領域について教育学研究の基盤となる基礎的知識と、これまでの既習事項や経験を活用しながら論じる出題への解答を通して、学修に臨むための知識・能力を評価するための出題である。

共通問題

(解答例)

課題図書である『国際バカロレア (IB) の教育とは』には IB では「国際的視野」とは外国の言語や文化の学習をすることだけではなく、物事を多面的に理解すること、自分自身を振り返ること、他者と協力することなどを通して身に付ける考え方、あり方、そして行動を指すと示している。従って、IB の教育の各要素が包括的に国際的視野の育成に貢献する。これは英語を学んだり、様々な国の民族衣装を着たり、国独特の食文化を体験したりという小学校などでよく実践されてきた「国際理解教育」が育成する資質・能力とは異なるのではないだろうか。IB の「国際的視野」の考え方が現在の日本の教育に様々な示唆を与えてくれるものであると考える。

選択問題

(解答例)

『やさしい発達と学習』には連合説と認知説の2つの学習理論が紹介されている。連合説は学習を外部からの刺激 (S) とそれに対する反応 (R) の間に結合 (連合) が形成されること、またはその強化によって行動が変化することと考える理論で、一方、認知説は学習を記号や意味を理解し、思考することで新しい知識や理解を構築するプロセスと捉える。学習理論によって学習の捉え方が異なれば教師の役割も異なることが想定出来る。これまでの日本の教育において教師に求められて来た役割が変化している中で、それを実践できる理論の理解と教師の学び直しが必要なのではないだろうか。

(解答例)

『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』にはコンピテンシーとその特徴が説明されている。統合的であり、文脈に基づいているコンピテンシーを育てるための教育改革が日本含めて各国で進む中、その指導のあり方についてはなかなか議論が進まない、もしくは深まらない現状があると言える。そのような中、『国際バカロレア (IB) の教育とは』にある6つの指導の方法はコンピテンシーを重視した指導のあり方の一例なのではないだろうか。それぞれの6つの方法がコンテンツからコンピテンシーをも重要視するカリキュラムに統合出来ないか、検討する意義があるかと考える。

Ⅱ期

共通問題

出題された英文は、小原國芳『全人教育論（改版）』（玉川大学出版部）に基づく。入試要項において本書は指定図書として明記され、事前に確認しておくことが指示されている。本問では、その前提に立ち、本文の内容を的確に理解しているかが問われる。

(1) 英文和訳が適切になされているかが評価基準となる。参考として指定図書の日本語原文を示すと次の通りである。「いうまでもなく、体育の目的は、優勝旗でも、メダルでも、レコードでも、カップでもないのです。手段と目的とを混同してはなりません。私は、体育の目的は、強靱なる体力、長い生命、調和せる身体、そして巧緻性だと思います。そのためにはまず、生理学的知識。基礎としての体操（デンマーク体操では、基本体操と、整美体操と、巧緻体操との三つを平均してやっとなことに敬意を払います）。そして、各種のスポーツ。特に、日本人たるために各種の武道のうち、少なくとも一つは選ばせたいです。」

(2) では、「the objectives of physical education are not championship flags, medals, records, or trophies. Do not mix up means and purposes」に下線が引かれ、この主張の理由が問われている。小原國芳の全人教育論における価値体系では、体育が「健」の価値創造に関わる領域として位置づけられている。したがって、体育は健康教育として理解されるべきものであり、その目的は優勝や記録の達成にではなく健康の実現にある。この点を、小原の価値体系論との関連において適切に説明できているかが評価基準となる。

選択問題

●教育学研究・初等教育研究・教師教育学研究コース

- ・我が国において教員の資質能力として重視されてきた「実践的指導力」について、特に教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策等について」や「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」に示された趣旨を正確に理解し、適切に説明できているかが評価基準となる。

なお、入試要項には、『教職概論（改訂第2版）』（玉川大学出版部）が推薦図書として明記されており、事前に確認しておくことが推奨されている。

- ・(1) は指定図書にある、学校安全に関する基本的な知識（事前の予防、初期対応、その後のシステム改善等）を確認し、(2) (3) は現状に関する課題を指摘して、あるべき姿を表現することを求めている。(1) では、例えば予防的措置の重要性を指摘する等が考えられる。(2) (3) では、例えば自己等に複数、チームで対応すべきこと等を指摘し、改善策を提示できると良い。
- ・(1) は指定図書にある、教育課程の基本原理に関する知識を確認し、(2) はその課題を指摘して、あるべき姿を表現することを求めている。(1) では、例えば教育課程とカリ

キュラムの違い、2つの水準等に触れられると良い。(2)では、例えば計画カリキュラムと実施カリキュラムの関連性等の課題が指摘できると良い。

- ・文科省・厚労省の教員のメンタルヘルス対策についてのまとめや報告書にある教員特有のストレスの知識を評価のポイントとしている。教員特有のストレス、すなわち対人職・学級担任制・長時間労働・ラインのケアの少なさ・重構造などの特徴が、個人で抱えやすい環境を作り、担任のために休みにくいことなどが受診を遅らせてしまう要因となっている。これらを理解して、予防を考えられると、自身も同僚たちも共に休職や離職に至る前に対策を練ることができる。

大学院において、初等教育研究または臨床心理学の視点からの教育学の研究を遂行するにあたり、最低限必要となる知識を確認するべく出題した。また指定図書の理解度を把握すべく出題した。

- ・「対話的な学び」とは、教師から生徒への一方向的な知識伝達ではなく、互いに考えを交わし合いながら共に学びを深めていくプロセスである。具体的には、グループディスカッションや共同作業を通じて、様々な視点を共有し合うことで、新たな理解が生まれる例があるとよい。出題意図としては、「主体的・対話的で深い学び」の中で、対話がどのように機能するかを、自分自身の身近な教育現場の例を通じて説明できることを期待している。

●乳幼児教育学研究コース

- ・「ドーナツ論」とは、人が世界と関わりを築く際に、まず自己(I)に共感的に関与する他者(YOU)との関係が不可欠であるという考え方である。このYOUは、文化的実践が行われている現実世界(THEY)とも関わりを持ち、IはYOUと一緒にあってTHEYと関係を築くようになる。この関わりのプロセスを自身の保育実践の具体例を通して説明することが期待される。具体的な事例を示すことで、ドーナツ論の実際的な適用や、その意義を深く理解し、自身の保育実践に生かす視点を論じることができるかを評価する問題として設定されている。

- ・日本の社会的養護の課題を知る事がとても重要である事は言うまでもない。この出題は、福祉的視点をしっかり理解することで、現状の課題とこれからの社会構造としてどのような方向性で検討する必要があるかについて総合的に解釈する事が求められている。

文献の中に示されている日本における社会的養護の仕組みを明確に記述することが必要である。また、世界との比較によって日本の特徴を示すと共に乳児院、児童養護施設の明記する事が求められる。それらを示した上で問題点を明確に示し、これからの社会的養護の方向性を示すと共に家族のあり方について触れる必要がある。

●国際バカロレア研究コース

本研究科のアドミッションポリシーの特に2の(7)にある国際バカロレアの教育の領域について教育学研究の基盤となる基礎的知識と、これまでの既習事項や経験を活用しながら論じる出題への解答を通して、学修に臨むための知識・能力を評価するための出題である。

共通問題

(解答例)

課題図書である『国際バカロレア (IB) の教育とは』には IB の 10 の学習者像が国際的な視野をもつ、より良い、より平和な世界を築くことに貢献できる人材の 10 の属性として説明されている。いずれかの学習者像の実現ではなく、すべての学習者像を目指すことがグローバルなコミュニティーの責任ある一員になることに繋がるとしている。文部科学省が整理したグローバル人材の概念は①語学力・コミュニケーション、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの 3 要素である。IB の 10 の学習者像と文科省のグローバル人材像とを比較検討することで、今後、教育の現場で育成する人間性が人物像として見えてくるのではないかと考える。

選択問題

(解答例)

『やさしい発達と学習』には連合説と認知説の 2 つの学習理論が紹介されている。連合説は学習を外部からの刺激 (S) とそれに対する反応 (R) の間に結合 (連合) が形成されること、またはその強化によって行動が変化することと考える理論で、一方、認知説は学習を記号や意味を理解し、思考することで新しい知識や理解を構築するプロセスと捉える。学習理論によって授業のあり方は異なることが想定出来、日本におけるこれまでの教育が何に依拠していたのか、これからどうなるのかを考える必要があるのではないだろうか。

(解答例)

『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』にはコンピテンシーとその特徴が説明されている。統合的であり、文脈に基づいているコンピテンシーを育てるための教育改革が日本含めて各国で進む中、その評価のあり方に課題も多い。そのような中、『国際バカロレア (IB) の教育とは』に IB からは厳格な評価の仕組みが提供され、教師は生徒が高次の思考を示すことのできる課題を作成する力が要求されることが記載されている。コンピテンシーの 3 つの柱を評価観点としてそれぞれ切り離して捉えることがどの程度妥当であるのか検討する必要があるのではないだろうか。

Ⅲ期

共通問題

出題された英文は、小原國芳『全人教育論（改版）』（玉川大学出版部）に基づく。入試要項において本書は指定図書として明記され、事前に確認しておくことが指示されている。本問では、その前提に立ち、本文の内容を的確に理解しているかが問われる。

(1) 英文和訳が適切になされているかが評価基準となる。参考として指定図書の日本語原文を示すと次の通りである。「われわれは生きねばならぬ人間です。『人はパンのみに生きるものにあらず』。然して、精神活動の不可欠の手段として健康を要求する如く、生きるためにパンを要求するのです。精神活動を有効に強大ならしむるために、そこには幾多の手段が必要です。発明、工夫、政治、外交、産業、軍事、交通、法律等一切に広義における富なる名称を冠します。富価値も結局は手段価値です。しかも健価値と同様に、不可欠の価値です。決して富を軽視するものではありません。何人にもまさりて私は富の力を認むるものです。否、旺盛なる精神活動を営まんとせばそれだけ大なる富を要求します。富は富自身には意味はありません。それを如何に有益に用いるかにその価値を生じて来ます。吾人は富の主人たるべきであって、富に使役されてはなりません。」

(2) では、「Wealth by itself has no significance.」に下線が引かれ、この主張の理由が問われている。小原國芳の全人教育論における価値体系では、絶対価値と手段価値が明確に区分され、富は手段価値に位置づけられている。したがって、富はそれ自体が目的となるものではなく、真・善・美・聖といった絶対価値の創造に奉仕することによってのみ意義を有する。この点について、小原の価値体系論を踏まえて適切に説明できているかが評価基準となる。

選択問題

●教育学研究・初等教育研究・教師教育学研究コース

・1994年の「サラマンカ声明」に示された理念、および2014年の「障害者の権利に関する条約」批准を受けて我が国で推進されている「インクルーシブ教育システム」構築の動向を踏まえ、その基本的趣旨を的確に理解しているかが問われている。理念的背景と制度的展開を関連づけて論理的に説明できているかが評価基準となる。

なお、入試要項には、『教職概論（改訂第2版）』（玉川大学出版部）が推薦図書として明記されており、事前に確認しておくことが推奨されている。

・(1) は指定図書にある、公教育に関する基本的な知識（例えば義務性、無償性、中立性、等）を確認し、(2) (3) は現状に関する課題を指摘して、あるべき姿を表現することを求めている。(1)では、例えば公教育の成立した理由等にも触れられると良い。(2) (3)では、日本の公教育では共通性や同調性等が高く、多様性、包摂等の重要性等を指摘し、改善策を提示できると良い。

・(1) は指定図書にもある、17/18年版学習指導要領に記載されている「カリキュラム・

マネジメント」に関する知識を確認しているのかを問うている、(2)はその課題を指摘して、あるべき姿を表現することを求めている。例えば教科等横断的な学習の形骸化等について指摘できると良い。

- ・生徒指導提要などをはじめとした、教育相談の学習をしているかどうか、教育相談の基礎力を評価のポイントとしている。具体的には、児童理解が発達の知識も加えてできるかどうか、教員としてチーム支援に繋げることができるかどうかを論じることが必要である。小学6年生の女兒は、第二性徴が始まり、体型やジェンダーが気になる時期でもある。女子がグループ化することにより、対人関係の悩みも増加する。また中学受験が大きなストレスとなることも多くみられる。これら年齢的な背景があるなかで、一人ひとりの理解をすることが大切である。さらに、体重減少もあるためにチームで支援していくことが必須である。

大学院において、初等教育研究または臨床心理学の視点からの教育学の研究を遂行するにあたり、最低限必要となる知識を確認するべく出題した。また指定図書の理解度を把握すべく出題した。

- ・エリクソンの「心理社会的発達理論」は、人間の成長と発達を出生から老年期までの一生涯にわたって捉える点が特徴である。この理論では、各発達段階において特定の発達課題と心理社会的危機が存在する。これに基づき、自己の理解や子どもに対する理解にどのような示唆が得られるかを考察することが重要である。出題意図としては、各段階での経験が個人のアイデンティティ形成に与える影響について論じ、その学びがどのように教育現場に臨むスタンスに資するかを示すことを期待している。

●乳幼児教育学研究コース

- ・従来の「文字的思考」と対比される「アートの思考」は、アートに触れたり観察したりすることで生まれる内的経験が豊かになり、広がりや深まりをもたらすものである。このような「アートの思考」を促進するためには、子どもたちと共に様々な物事を探求する姿勢としての「聴き入ること」が重要であり、このプロセスを通じて、保育の場の学びは深まる。また、「アートの思考」の背後にあるレッジョ・エミリアの教育理念について触れることで、その具体的な実践や意義を述べることも可能である。従来の一方向的な教育ではない、保育の場の教育について考えるための問題として出題した。

- ・子育ての基本について多角的に記述されている内容についての把握と、日本が抱えている子育てについての困難さを丁寧に把握する事が求められている。その中から基本となる概念を捉え、今後の課題を明確にすることが必要である。

文献で子育ての課題になっている事についての記述が求められる。特に、妊娠から出産、様々なリスクについて明確に示すと共に子育ての基本となる安心と多様性の意味を明記する必要がある。以上について、抽象的なレベルではなく具体的に示す事が必要である。

●国際バカロレア研究コース

本研究科のアドミッションポリシーの特に2の(7)にある国際バカロレアの教育の領域について教育学研究の基盤となる基礎的知識と、これまでの既習事項や経験を活用しながら論じる出題への解答を通して、学修に臨むための知識・能力を評価するための出題である。

共通問題

(解答例)

課題図書である『国際バカロレア (IB) の教育とは』には6つの指導のアプローチと5つの学習のアプローチがIBの教育の指針として挙げられている。指導のアプローチは教師の授業ストラテジーであり、学習のアプローチは生徒が身に付けるべきスキルと言える。学習指導要領などのナショナルカリキュラムに規定されているどのような学習内容を取り扱う際もこのアプローチが授業のあり方を、また生涯学習者としての学び方を身に付けることを支える仕組みである。これは文部科学省がその重要性を強調している探究学習や自己調整型学習をも支えるアプローチである。何を教えるかに加えて、どのように学習目標に近づけるのかを考える時、これらのアプローチは参考になると考えられる。

選択問題

(解答例)

『やさしい発達と学習』には連合説と認知説の2つの学習理論が紹介されている。連合説は学習を外部からの刺激 (S) とそれに対する反応 (R) の間に結合 (連合) が形成されること、またはその強化によって行動が変化することと考える理論で、一方、認知説は学習を記号や意味を理解し、思考することで新しい知識や理解を構築するプロセスと捉える。学習理論によって評価のあり方は異なることが想定出来、日本におけるこれまでの学校における学習評価の選別機能のみならず教育機能を重視するアセスメントやフィードバックのあり方に少なからず影響をもたらすものと考えられるのではないだろうか。

(解答例)

『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』にはコンピテンシーとその特徴が説明されている。統合的であり、文脈に基づいているコンピテンシーを育てるための教育改革が日本含めて各国で進む中、学習のあり方にその視点が十分に取り入れられているかどうかは疑問である。そのような中、『国際バカロレア (IB) の教育とは』に指導のアプローチや学習のアプローチが示されている。これは知識やスキルや態度を結集させる学習の経験をもたらすことに有効で、コンピテンシーの育成に貢献すると考えられる。コンテンツ重視ではなく、コンピテンシー重視の視点が学習のあり方に影響を及ぼすことは間違いないのではないだろうか。